

2007年秋季大会実施報告

大会・企画委員会

1. 概要

2007年秋季大会は、10月24日(水)～10月26日(金)に仙台市国際センターにおいて実施し、870名(会員673名、非会員等197名)と昨年同様に多数の参加がありました。講演数は、口頭268件、ポスター297件の合計565件(うち緊急セッション66件)の申込がありました。今大会も昨年と同様に口頭会場が4会場だったため口頭1講演を15分としました。

今回の大会では4件の特別セッションが提案されるとともに、講演受付期間中に発生した新潟県中越沖地震を受けて緊急特別セッションが組まれました。また、今回の大会でも若手学術奨励賞受賞者による記念講演を大会初日に実施しました。初日から最終日まで2会場にわたって各特別セッションが行われ、ポスターセッションも含めて様々な発表が行われました。一方で、今回は特別セッションが全体の講演の半分近くを占めることになり、近い分野の講演が特別セッションとレギュラーセッションで並行して行われることを避けるのが困難でした。

運営面では、東北大学のLOCの皆様にも全面的にお世話になりました。また、各セッションの座長をお願いした皆様、ご協力ありがとうございました。この場をお借りして感謝申し上げます。

2. 一般公開セミナー報告(LOCから)

一般公開セミナーは、日本地震学会主催のもと、「宮城県沖地震研究の最前線」と題して、10月27日(土)午後1時30分から仙台市情報・産業プラザ多目的ホールで開催されました。当日は台風20号が太平洋沿岸を北上中で、仙台市内でも風雨が強かったにもかかわらず、入場者は126名とまずまずの入りでした。講師の両先生には、最新の調査・観測に基づいて、過去宮城県を襲った巨大地震による津波災害の話題から、現在宮城県沖のプレート境界で起きている現象と今後の予測、といった幅広い内容についてわかり易くお話し頂き、各講演のあとには活発な質疑応答も行われ、ご来場頂いた方にはご満足頂けたのではないかと考えております。新聞・テレ

ビなど報道関係の方にも多数おいで頂きました。講演いただいた講師の皆様、ご協力いただいた各方面の皆様にお礼申し上げます。

<講演>

岡村行信(産業技術総合研究所活断層研究センター)

「仙台平野の地層に記録された巨大津波の痕跡—西暦869年貞観津波の実像—」

長谷川昭(東北大学大学院理学研究科)

「想定宮城県沖地震の震源域で何が起きているか?」

3. 大会を終えて(LOCから)

2007年秋季大会は東北大学大学院理学研究科附属地震・噴火予知観測センター、および同研究科地球物理学専攻固体地球物理学講座が共同でLOCを務めました。開催期間中最終日以外は、好天と暖かさにも恵まれ、参加された方々には8年ぶりの仙台での学会を楽しんで頂けたことと思います。

昨年名古屋大会に引き続き、今大会も会場の使いやすさや、参加者の利便性等を優先して、大学内の施設ではなく、仙台国際センターを会場とすることにしました。今大会では、名古屋大会で実施されたアンケート調査の結果をできる限り反映させるよう配慮したつもりです。名古屋大会では、口頭発表を4会場で行ったこと、ポスター発表と企業・団体展示を同一会場にしたこと、無線LANのサービスなどが好評だったため、これらについては今大会でも踏襲しました。特に今大会ではポスター会場として広い会場を確保し、混雑することなくじっくりと議論ができるようにポスターの形式を横長にしたり、パネル間隔をできるだけ広く取りました。この点については、多くの会員から高く評価していただきました。

これまで、学生の参加費は一律2,500円(予稿集付)ということでしたが、地元の学部学生が経済的負担なしに参加できるように、大会直前になってから大会・企画委員会にお願いして、予稿集が不要の学部学生に限り無料で参加できるようにしていただ

きました。東北大学では、学会開催時期に研究室未配属の宇宙地球物理学科（地球物理学コース）の学部2、3年生がそれぞれ28名在籍しており、近年志望学生の減少傾向がある固体地球科学系配属希望者の増員につながればというLOCからの要望を聞き入れていただいたわけです。その結果、無料で参加した学部生は13名を数えたとのことで、多くの学部生に地震学会の雰囲気を感じてもらえたものと思います。

一方、反省すべき点として以下の点があげられます。D会場はセッションによっては、狭小であったことが担当座長からのセッションレポートで指摘されました。また、昼休み時間を利用して行われる各種会合を講演会場内で開催することとしたため、午後のセッションの開始に支障をきたしたことも報告されました。これらの点は、限られた予算との兼ね合いもありますが、今後の大会運営では、最小の会場でも120名程度の収容人員を確保すること、昼休みの会合用に別途会議室を確保することなどを検討する必要があると思います。また、初日午前の受付業務については、十分な人員を配置して臨んだつもりでしたが、結果的にとても混雑してしまい、多くの会員にご迷惑をおかけしました。今回は受付カウンターを会費納付済みの会員用、会費未納会員用、非会員・報道関係者・展示担当者用の3種類に分けたうえで、手すきのカウンターが混雑しているカウンターをサポートするという体制をとったにもかかわらず、あまりうまく機能していなかったようです。解決策としては、混雑の原因の一つが会員名簿の検索に時間がかかってしまったことも考えられるので、受付カウンターをあいうえお順に分割することや、予稿集の販売窓口を独立させることなどが考えられると思います。

最後になりますが、多くの方々のご協力の下で無事に秋季大会を終えることができました。大会にご

参加下さった皆様、ご協力下さった方々に深く感謝申し上げます。

4. その他

今大会では、LOCからの報告にもあるように昨年大会中に行ったアンケート結果をできるだけ反映させるように、特にポスター発表の環境改善に努めました。例えばポスター発表者もできるだけコアタイムに他の発表を見ることができるよう、コアタイムを2つに分けました。また昼休みが短すぎないようにしました。3日目は終了時間を遅くし過ぎてしまい、会場によっては聴衆が非常に少ない状態になってしまいました。ご迷惑をおかけした方々にこの場をお借りしてお詫び申し上げます。

今年から、予稿内容について大会やセッションの趣旨に合うかどうか、科学的に不適切でないか、社会倫理上不適切でないかといった点をチェックし、採択するかどうかの判断を委員会ですることになりました。科学的に適切かどうかで議論になったものが少数ありましたが、最終的にはすべて採択しました。科学的に適切かどうかの判断の基準はそれほど単純ではなく、今後も判断基準について検討していく必要があると思われます。

大会・企画委員会では、今後も大会において健全で活発な議論がなされ、地震学のさらなる進展につながるよう、よりよい大会運営を目指して検討していきます。会員の皆様にも、積極的なご協力をよろしくお願い致します。

5. 大会プログラム修正等

○変更

D12-03とP1-005の差し替え（講演者のミスによる）

○キャンセル

B32-07, B32-11, P3-049

（文責：堀 高峰）